

学びの楽しさを、指導しましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

2年生「かけ算のきまり」では、九九表を使ってどんな学びの楽しさを指導したらよいのでしょうか？

A

この頃になると、多くの子供たちは、上がり九九、下がり九九、バラ九九がすらすら言えるようになります。しかし中には十分でない子がいますので、常に児童名簿を使って一人一人の実態を的確に掴んでおきましょう。遅れ気味の子に対しては、今からでも十分に間に合うといった温かな言葉かけをして、九九表を見ながら学習ができる支援体制を作り、継続した指導をしましょう。

この単元では、単元全体を通して、毎時間九九表の作成をさせることから授業に入ります。前述したように、「今日は上がり九九から（下がり九九から）かきましょう」といった、発問を工夫するとよいでしょう。子供たちからP67のかずさんやゆいさんのような気づきを出させるためには、1年生の100までの数の表を使うことを勧めます。数の並び方の違いについて問うと、子供のほうからいろいろな気づきが出てくると思います。そして、気づいたことを「きまり」と言うことを伝えましょう。なぜなら、きまり（法則）は、この単元で初めて出てくる表現だからです。子供たちが思い抱いている日常のきまりとは幾分ニュアンスが違いますので、丁寧に指導することが大切です。

P68からは、前時の学習を活用します。まずは九九表をじっくり観察させましょう。かける数が1ふえると答えはかけられる数だけふえることや、かけられる数とかける数を入れかえても答えは同じになること、そして、こうしたきまりから、同じ答えが3つあったり4つあったりする九九や、2の段と3の段をたすと答えは5の段になることなどが見えてきます。これらが見えた段階で学習計画を立てて指導していきましょう。この単元は、しっかりした導入を行えば、学習計画を立てやすい単元になります。そして、子供たちは、自分たちで発見したきまりから学習の見通しが持てると、楽しさを一層感じるようになります。この学習で大切なことは、かけ算のきまりを正

しく表現させることです。そして、この正しい表現を使って、他のかけ算についても調べさせ、同様に正しく表現させるようにしましょう。

九九を広げる学習では、かけ算のきまりを使って、九九にないかけ算の答えを求めさせます。答えを求めるときには、どんなかけ算のきまりをどのように使って求めたのかを発表させます。学びを活かす学習とはまさにこのような学習を指しています。ここでの 12×4 の学習は、3年生「1けたをかけるかけ算のひっ算」の導入素材になっています。したがって、指導の仕方を工夫して、子供たちかられんさんやそらさん、かずさんの考えを引き出し、心に残る深い学びを行えば、なだらかな移行ができます。このように、啓林館の教科書はスパイラルで学んでいけるように工夫されています。そして、この学習で学びの楽しさを味わわせたら、P124の「もっとれんしゅう」にも取り組ませましょう。

Q

2年生「100cmをこえる長さ」では、どんな楽しさを指導したらよいでしょうか？

A

測定は、仲間と一緒に楽しく学べる内容です。授業に入る前に既習事項の調査をしましょう。その時には、2年生「長さ」の学習と本単元の学習を比較できる問題を設定するとよいでしょう。そして指導の際は、「長さ」の単元でどんな学習をしたかを確認して、同じような展開をしていきましょう。長いものさしを導入するには、P77のかずさんのようなつぶやきを持たせることです。仲間と一緒に30cmのものさしを何本もつなげて測り、その不便さを体得すると、1mのものさしのよさが実感できます。単位も同様で、同一の単位をいくつもつなげていけば、数値が大きくなり大変になると感じさせることで、新しい単位の必要性に気づかせます。

30cmのものさしは家庭に持ち帰ることができますが、1mのものさしは学校でしか使えませんので、測定の活動に時間をかけましょう。また、P80の問2の「本のあつさ」では、mmの単位を忘れていて出来ない子がいると思いますので、ここで、もう一度復習して定着を図りましょう。このように、算数はスパイラルで学習するようになっています。

長さの計算は、2年生上の「長さ」で学習した $4\text{ cm } 5\text{ mm} + 4\text{ cm}$ の復習をしましょう。そして、 $2\text{ m } 50\text{ cm} + 1\text{ m } 20\text{ cm}$ の計算の仕方を考えさせてください。既習の計算問題と比較対照すると学習の定着がより確かなものになります。

